11 障害児教育

関　和典，藤村佳令，中田美緒，松本典子

1　研究テーマのとらえ方

(1)　養護学級の教育目標と「自立に向かう子どもたち」像

本学級では，「生活力のある児童」をめざしている。「生活力のある児童」の姿として次の３つの力を描いている。

・ことばや行動で自己を十分に表現し，主体的に行動する力
・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で，生活や学習をする力
・いろいろな場面で判断したり，工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この３つの力を総合すると，「児童がその子なりの考えをもち，よりよい方向をめざして進んで考え，判断し，表現していく（行動していく）力」であり，この力をもつ児童が「自立に向かう子ども」と考える。

(2)　人やものとのかかわり

児童が学校生活においてかかわる人は，友だちや教職員であり，かかわるものは，校内や教室内に環境として設置されている物品や教材・教具である。児童の１日の学校生活を細かに見ていくと，多くの人やものとかかわっていることがわかる。その中で最も多くかかわっている対象，またはかかわってほしいと指導者が願っている対象は，友だちである。友だちとのかかわり方は，児童の実態によりさまざまである。直接的なかかわりもあれば，ものを介してのかかわりもある。いずれにせよ友だちとかかわることにより，ふれあいが生まれ，会話が生まれ，心の葛藤が生まれる。小さなかかわりの積み重ねが，児童の心を刺激し，鍛え，豊かにしていく。それが，自立に向かうための要因になっていくと考える。かかわる活動を通して，児童一人一人がかかわる楽しさを感じたり，かかわることに自信をもったりしながら，社会や多様な集団の中で自分らしさを発揮し，表現していくことができるようになることを願っている。

2　研究推進について

(1)　個々の実態とかかわりの場

児童がどのように人やものとかかわっていくか，一人一人の実態は異なっている。したがって，かかわりの場は，個々の実態によって設定される必要がある。そこで，単元全体の中のどこでかかわっていくか，１単位時間の中のどこでかかわっていくか，どのようなかかわりをするのかを明らかにしていく。そして，個々の目標行動の中に，かかわりに関する内容を設定していくようにした。

(2)　かかわりを視点においた支援の捉え方

本学級では，めざす子ども像の具現化に向けて，次のような活動や場を設定し，実践を積み上げてきている。

①自己決定する場や活動の設定
②社会や多様な集団でのかかわりの場の設定
③学習の汎化を図る場や活動の設定

本年度も，本学級が作成した独自の表（次頁）をもとに，「選択についての実態」と「集団へのかかわり」から「支援」のあり方を探っていく。

研究テーマ「人やものとかかわることを大切にして」にはじめて取り組んだ昨年度は，②についての研究を深め，＜集団へのかかわり＞の一部を児童の実態から見直し，「友だちとのかかわり方」の捉えについて検討してみた。児童の「友だちとのかかわり方」は，大きく「自己主張しながらかかわる」段階と「自分と友だちとの考えを比較し，調整を図りながらかかわる」段階があるのではないかと考え，＜集団へのかかわり＞の捉えをよりスモールステップに細分化した。

本年度は，＜集団へのかかわり＞を児童の実態をもとにさらに詳細に示していくとともに，かかわりについての＜支援＞をどのように捉えることができるか探っていきたい。

＜選択についての実態＞	＜　支　援　＞	＜集団へのかかわり＞
偶然手にした方を選んでいる。	・児童が好んでいるものを選択肢にする。	指導者といっしょに活動をする。
友だちや指導者の模倣によって選んでいる。		
好き，嫌いの好みの視点が明らかになって選んでいる。	・選択肢のイメージをもつことができる具体的な手かがりを示す。 ・模倣できる場を多く設定する。	指導者のことばかけで活動をする。
友だちや指導者の活動への関心から選んでいる。	・児童が特に好んでいる活動の中での選択場面を設定する。	友だちの動きを手がかりに活動する。
友だちや指導者の活動を見て見通しをもった方を選んでいる。		
過去の経験から見通しのもちやすい方を選んでいる。	・過去の類似の体験をイメージすることができる具体的な手がかりを提示する。	集団での活動の仕方がわかり自己主張しながら友だちとかかわって活動する。
自分にとって乗り越えなければならない課題の有無で選んでいる。	・児童が課題と捉えていることについて課題達成までの見通しをもつことができるような具体的な手がかりを提示する。	集団での活動の仕方がわかり自分と友だちの考えを比較し調整を図りながらかかわって活動する。

3　研究の成果

(1)　<集団でのかかわり>を多面的にみとることができた。

児童が友だちとかかわり合いながら活動していくことを意図的に設定することで，児童が他者とのかかわりをより多くもつことができるようになってきた。具体的には以下のようなかかわりの集団を設定した。

○　人間関係を考慮した同じクラスによる２～３人 ○　人間関係を考慮した異学年による２～３人 ○　学習が進む中で，同じめあてをもつことになった数人

このような集団を設定することで，かかわりが多くなるという面だけでなく，生活年齢や発達段階の違いからそれぞれの児童が他者（主として友だち）とかかわるとき，自主的な活動を行っていくための支援のなかにリーダーの存在が必要となることがあるという点も考えることができた。

また，集団の組み方で児童が他児と自然なかかわりをもちながらスムーズに次の活動に移ることができるということも児童の様子からみとることができた。

かかわりの質については，本年度の実践の中では，新たな成果を表すことはできないが，個々の発達段階の中で児童が「かかわる」ということをどうとらえるかということについては，共通的な部分を多く見ることができた。

(2)　表の妥当性がより明確になってきた。

前頁の表については，平成９年度から作成し，平成11年度には，新たに<集団とのかかわり>という項を設けて研究を進めていった。今年度児童の様子からこの表によってなされた支援はそれぞれの児童に対してほぼ適切であったと考えることができる。各障害児教育の実践の中で詳しくはふれてあるが，「選択についての実態と集団へのかかわりを線で結んだところの支援」という考え方は，ほぼ妥当性があるということが考えられるようになった。

4　今後に向けての課題

(1)　「かかわり」と支援の関係についての，より綿密な考察

①　表の細分化について

今年度，表の細分化を目標としていたが，表を検討するにはより多くの実践の積み重ねが必要となる。今後も表の妥当性について実践をしていく中で検討を重ねていく必要がある。

②　選択についての実態の見直し・精選について

本年度は<集団へのかかわり>について，表の見直しを図っていったが，<選択についての実態>についても，さらに細分化できるのではないかと考える。児童が，自分たちの考えでいろいろなことを行うことができるようになってきたという成果をもとに，今後見直しを図っていく必要がある。

(2)　「総合的な学習」の位置づけについて

来年度から，「総合的な学習」を行っていく上で，まだ明確になっていない部分が多く残っている。教育課程全般をもう一度見直しながら，本校の児童にあった教育課程のあり方，「総合的な学習」の実施の仕方を実践の中から検証・修正をしていくことが必要となってくる。